

群 教 セ	G14 - 01
	平14.205集

これが評価の パラダイム転換だ！



主 題 総合的な学習の評価の工夫
- 教師・子ども・地域が納得できる評価へ -

長期研修員 木村 正臣 総合的な学習班

研究の概要 総合的な学習では、子ども・教師・地域の三者が納得できる評価が求められている。そのためには、子どもの自己評価力を高めることはもちろん、教師や地域の評価力も高めていかなければならないという評価観の転換が必要である。本研究では、教師の観察やポートフォリオ、外部評価など多様な評価方法を長期的な計画のもとに工夫し、子ども一人ひとりに応じたきめの細かい評価や支援を通して、総合的な学習のねらいにせまる実践を行い、三者の評価力を高めていこうとした。

キーワード 【総合的な学習 - 小 学習過程 自己評価 相互評価 外部評価 ポートフォリオ】

今、評価に求められるものは

平成 14 年 5 月、群馬県下の小中学校の教職員 501 名を対象に、総合的な学習の評価に関する調査を実施した。図 1 と図 2 から、評価が総合的な学習を進めていく上での実践上の大きな課題であることがわかる。また、評価について悩みがあると回答した教師 321 名に対して、どんな悩みが聞いた。286 名から回答があり、以下のような具体的な記述があった。

今ある評価方法よりもう少し子どもの成長がわかる評価方法がないが。
どんな学力がついたのか評価できない。
教師間の評価力量の差や共通理解、教師と保護者の共通理解。
今年度から通知票を記述していくが、どのような評価になっていくのかよくわからなくて不安である。
何をやったのか事実しか書けない。

これらから、問題解決力や生きる力を、学習活動での子どもの姿から、どのような観点や方法で評価したらよいか、またそれをどのように指導に生かしていったらよいかなど、現時点での教師の抱える様々な悩みや課題を推察することができる。以上のことから、総合的な学習では、教師の評価力が大きく問われている。そして、子ども・教師・地域の三者が納得できる評価が強く求められていると考える。

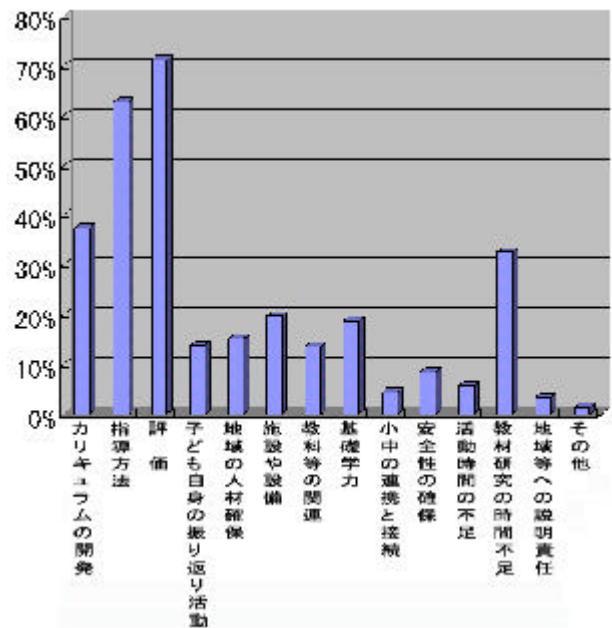


図 1 群馬県内の小中学校教師がもっている総合的な学習での実践上の課題 (H14.5月現在)

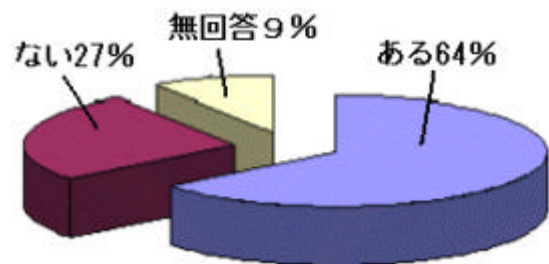


図 2 総合的な学習の評価についての悩み

研究のねらい

総合的な学習において、子ども・教師・地域の三者が納得できる評価観の転換をめざす。まず、子どもの自己評価力を高めていくために、学習過程を工夫し、長期的な計画のもとに多様な評価方法を活用し、子ども一人ひとりに応じたきめの細かい評価や指導を工夫する。そして、子ども一人ひとりが自己を見つめ、学ぶ喜びを感じることができるようにするとともに、教師と地域の評価力も高めていく。

研究の内容と方法

1 学習意欲を高め、子どもの自己評価力を育てる学習過程

子ども一人ひとりが、自分を見つめ、学ぶ喜びを感じることができるために

総合的な学習がねらいとする問題解決力や生きる力は、子ども自身の気づきから生まれた課題を追究していくことを通して、自分を見つめ、学ぶ喜びを感じていく経験の中で身に付けていくものであると考える。このことはすなわち、

学習意欲を高め、子ども自身の自己評価力を育てていくことでもありとらえた。

一方、教師の評価活動は、教師が子どもと出会う授業の場において、子どもの学ぶ姿を教師がどのように見取り、それをどのようにより良い指導へと生かしていくことができるかということである。子どもが学ぶ姿、とりわけ内面を評価していこうとすることは、指導と評価の一体化のために不可欠である。

これらのことから、子ども一人ひとりが「こんな自分になりたい」という課題に基づいた目標もてるようになり、そして未来に向かって自分を変えていく力が生み出せるような学習過程を構想した。

2 学習過程と多様な評価方法の工夫

三者が納得できる評価をめざして

そこで、多様な評価方法を学習過程の中で、長期的な計画のもとに効果的に取り入れていけば、教師が子どもの学ぶ姿をよりわかりやすく見取ることができるのではないかと考えた。そして、子ども・教師・地域の三者が納得できる評価をめざして、図3の研究構想図にあるよう

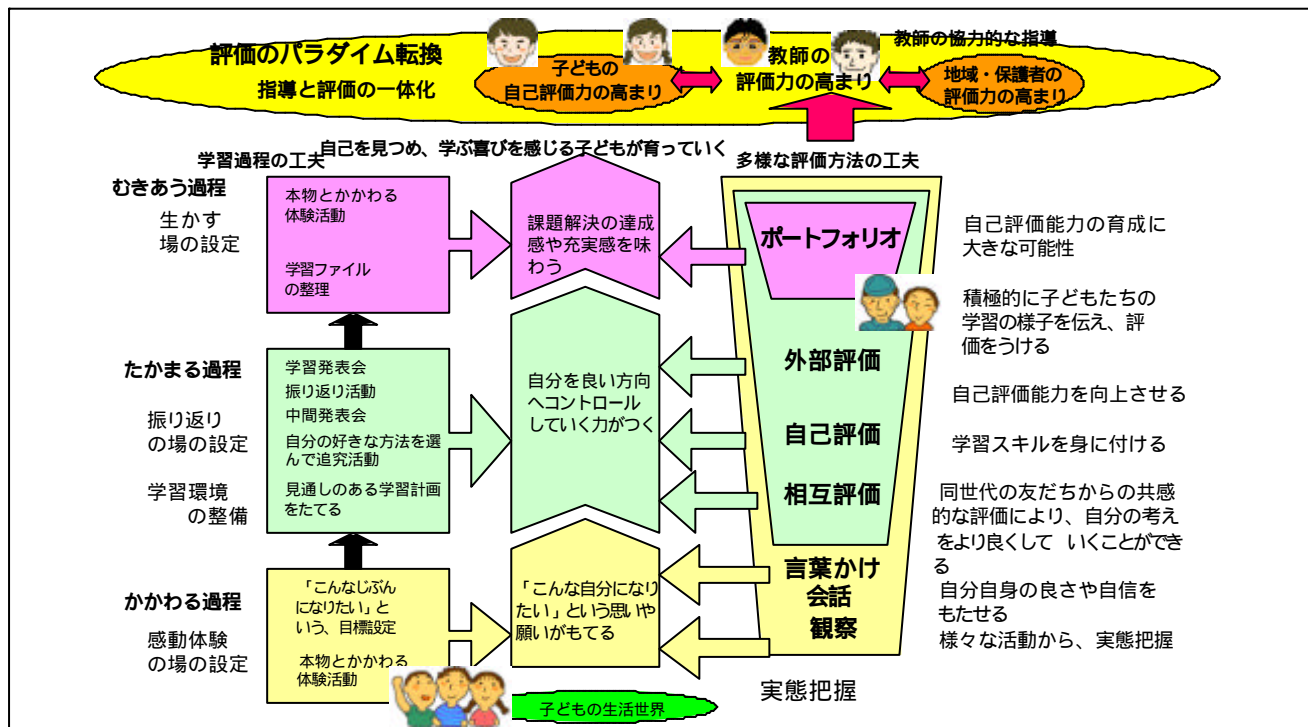


図3 研究構想図

な学習過程と多様な評価方法の活用について構想した。その際、教師の評価力が問われる。だから、子ども自身の自己評価力を高めていくことと同じように、教師一人ひとりの評価力が高まっていくことも必要であると考えた。また、一人の教師の偏った評価にならないように、複数の教師による評価も必要である。さらに、保護者や外部講師など地域の評価も取り入れていくことも不可欠である。教師の評価力と子供の評価力、地域の評価力をそれぞれ一面的にみるのではなく、三者が高まることによる相乗効果があるのではないかと考えた。

3 評価の目的と方法の相関表の活用

評価観の転換の重要性

今、教師の評価観が問われている。特に総合的な学習では、評価観を磨いていこうとする自覚が教師に求められる。そのために、多様な評価方法を図4の評価の目的と方法の相関表のようにとらえ、子ども、教師、地域が評価力を高めていくことができる評価法を工夫していくことを考えた。その際、何のために評価するのかということを明確にするために、評価の主体と対象を目的と方法とのかかわりにおいてとらえられるようにした。そして、縦軸(A～H)

・・・主として活用する ・・・補助的に活用 ×・・・不適

評価方法と評価の主体		方法	観察	言葉かけ・会話	自己評価	相互評価	外部
			行動・発言・発表・ワークシートの書き込み・つぶやき・しぐさ・デジタルビデオなど	質問・アドバイス 模範など	作文・ワークシート チェックシート・ポर्टフォリオ・お礼の手紙など	作文・ワークシート チェックシート・話し合い 発表など	言葉、または手紙やメールなどによる感想・アドバイス・チェックシートなど
評価の目的と対象		主体	教師		子ども		保護者・地域
目的	対象		1	2	3	4	5
一人一人の実態把握	子ども	A					
身についた力を見取るため		B					
学習意欲を高めるため	一人ひとり	C	×				
生き方を問いかけるため		D	×				
学習活動の改善のため	教育活動	E					
教師の指導力向上のため	教師	F					
通知票や指導要録の資料として	教育内容	G					
地域や保護者に対する啓発	地域	H	×	×		×	

図4 評価の目的と方法の相関表

と横軸(1～5)の相関によって評価計画をたて、評価活動を行っていくことを考えた。

例えば、評価の主体(方法)と対象(目的)は、単元の中での位置づけや授業のねらいから、様々に決められる。評価計画の本時の展開の中で、「**AEFGH - 3《ワークシート、作文、お礼の手紙》**」という場合は、次のようになる。

AEFGH - 3《ワークシート、作文、お礼の手紙》
縦軸対象(目的) 横軸主体(方法)

つまり、子どもが自己評価するワークシートや作文、お礼の手紙などから、子どもの内面を見取ることを中心にしながらも、学習活動の改善やカリキュラムチェック、教師の指導力向上、地域への啓発などにも生かしていけるように評価するということになる。

以上のような方法により、学習過程に計画的に位置づけた多様な評価方法の妥当性を確かめるとともに、子ども・教師・地域の三者の評価力を高めていくという評価観の転換をめざした。本研究では、小学校4年生の「交流のわをひろげよう」という単元で授業実践した。評価規準と評価項目を相関させることにより、さらに総合的な学習のねらいにせまれるよう工夫した総合評価表(資料編参照)をもとに、評価計画(資料編評価計画と指導経過参照)をたてた。

は、研究後の見直しから訂正されたもの。

4 研究実践の計画

対象 孺恋村立干俣小学校 第4学年(14名)
授業実践の期間 平成14年9月24日～12月4日(全32時間)
授業者 木村 正臣, 斉藤 大輔

5 研究実践の計画

検証の場とキーワード

検証の場	検証のキーワード
かかわる過程	感動体験の場 内面にせまる見取り こんな自分になりたい
たかまる過程	振り返る場 自己評価 自分を良い方向へコントロールしていく力
むきあう過程	生かす場 ポートフォリオ 新しい自分を見つけ学ぶ喜びを感じる
学習過程全体	多様な評価方法 個人評価カード 教師・子ども・地域の評価力

研究の展開

1 単元名

交流のわをひろげよう

2 目標

地域の聴覚障害をもつ人との交流から、人とのふれあいを深め、積極的に交流の輪を広げていこうとする態度を育てる。

3 評価規準

学習への関心・意欲・態度

障害をもつ人と楽しく交流するためにどうしたらいいか、自分自身の問題として興味・関心を持ち、意欲的に追究していくことができる。

総合的な思考・判断

解決するために自分にとって一番良い方法を見つけ、自分自身の学習活動を見直しながら、見通しをもって問題解決し、総合的に考える力を伸ばしていこうとする。

学習活動に関わる技能・表現

自分のできることをいろいろな方法で調べ、学び方を身に付けたり表現力を高めることができる。

知識を応用し総合する力

自分について見つめ直すことにより、いろいろな人とコミュニケーションすることの良さが自分なりにわかり、これからの生活のなかで積極的に交流の輪を広げていくための力がつくられる。

4 評価の観点と項目

資料編 総合評価表 参照

5 指導計画

資料編 評価計画をふまえた指導経過 参照

研究の結果と考察

1 かかわる過程

検証のキーワード：
 感動体験の場
 内面にせまる見取り
 こんな自分になりたい

第2～3時に、地域の聴覚障害者と手話通訳者をクラスに招いて、楽しく交流する体験活動を計画した。(資料編「指導案」参照) 図5は、その時のじゃんけんゲームの様子であるが、日頃から親しんでいる簡単なゲームを取り入れたことで、聴覚障害者と楽しく交流できた。そして図6の交流会後のお礼の手紙にあるように、本物に直接触れあったことが、うれしさや楽しさ、感謝の気持ち、目標や理想がもてるといった感動を、子どもたち一人ひとりに様々なかたちで呼び起こすことができたと考える。図7と図8のJ男とM子の自己評価の様子からも、聴覚障害者との直接の交流による感動体験の場の設定は、子どもの内発的な学習意欲を高めるために重要なはたらきをしていたと考えられる。ところで、子ども一人ひとりの内面にせまる見取りを可能にするために、かかわる過程では特に実態把握や学習意欲を目的として、観察と言葉かけ・会話を計画的に取り入れた。(資料編「評価計画をふまえた指導経過」参照) 具体的な観察方法として、つぶやきやしぐさは、授業中に教師の集中力が要求される。評価対象



図5 本物とかかわる体験活動

田中さんと高橋さんへ
 M子
 田中さん、わたしと高橋さんと交流したいです。わたしは、ゲームが好きです。あとも、冬を教えることがしたいです。手話の勉強もしたいです。よろしくお願いします。

田中さんと高橋さんへ
 J男
 ぼくは、田中さんと高橋さんと話したいです。田中さんが手話を教えてくれたので、私も手話を勉強したいです。高橋さんが空に書いてくれたので、私も書いてみたいです。よろしくお願いします。

図6 交流会後のお礼の手紙

児を意識的にきめて、言葉かけ・会話と合わせてピンポイント的に活用していく場合が効果的だった。特に今回は教師の協力的な指導を工夫したが、主として全体指導するT1に対して個

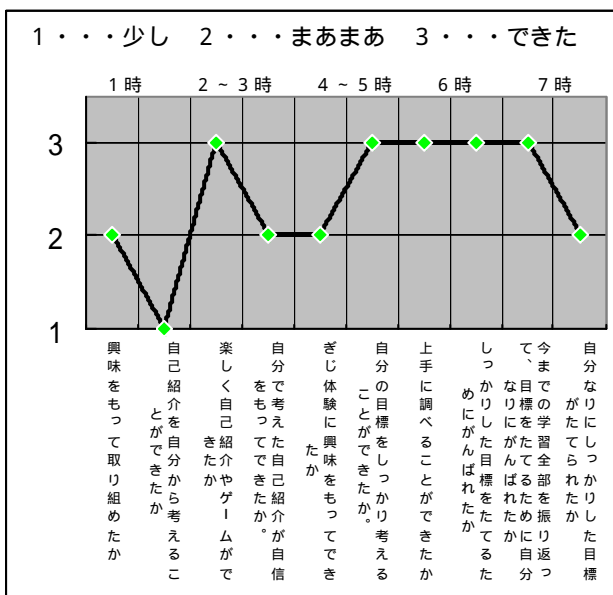


図7 J男のワークシートの自己評価の様子

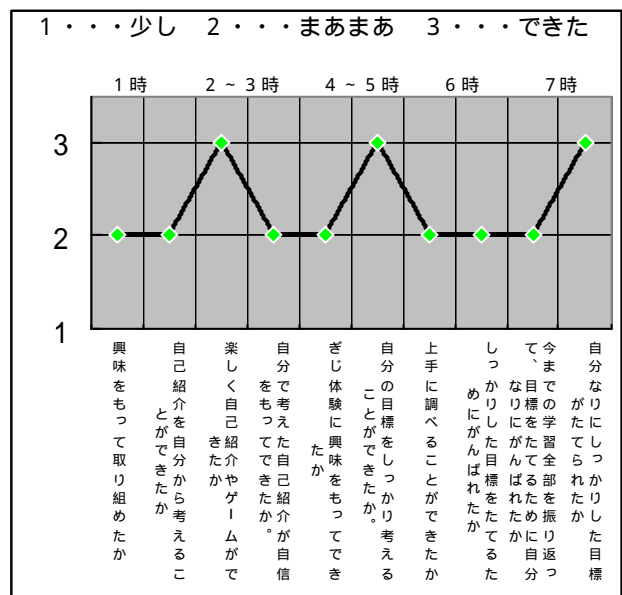


図8 M子のワークシートの自己評価の様子

	J男 児童の実態 (反応・様子・発言など)	M子 児童の実態 (反応・様子・発言など)
1 時 指 導	・話し合いを黙って聞いていた。指文字の手話の本で、君と君の4人で自己紹介を考えていた。 ・(ワークシートの自己評価では)自己紹介が自分からできたかという項目が「少し」だった。しかし感想では楽しかったと書いていた。	・最初なかなか話し合いに参加できなかったが、隣の君に話しかけたりして、意欲が高まってきた。ちゃんと指文字で手話の自己紹介を考えていた。 ・(ワークシートに)質問を3つ考えて記述していた。
2 時 本 物 体 験	・自己紹介は黒板でした。 ・ジェスチャーゲームでは、猿の真似をよく考えてしたが、はずかしそうにしたのでなかなか伝わりにくく、手話通訳者の高橋さんからアドバイスをもらっていた。	・手話で自分の名前を正しく自信をもって自己紹介した。また途中で分からなくて困っている友だちに自信をもって「き」を教えていた。 ・質問で「生活の中でなにか不自由なことがありますか。」と聞いていた。作文にもそのことが書いてあった。またお礼の手紙に、「今度会うときには手話でいっぱい話をしたい。」と書いてあった。
4 時 擬 似 体 験 課 題 設 定	・筆談ではなかなか友だちとの会話が成立していなかったが、自分なりに会話が成立したと感じていた。目標が低すぎるので、調べる目的がはっきりしていない。目標がしっかりとられるような支援をしていきたい。 ・インターネットで確かめた後、「自分から目標に対して簡単すぎるのがわかった。次時は自分なりにどんな目標に修正していけるか見守り、適切な支援ができるようにしたい。	・疑似体験では、聴覚障害者の身になって意欲的に考えることができていた。目標もしっかりした考えからたてられていた。もっと広い視野で目標を見直すように支援したい。
6 時 課 題 設 定	・「自分の手話で自己紹介ができて、(聴覚障害者の)田中さんと手話で話ができる自分になる。」というふうに、目標を自分なりに高く設定することができた。しかしもっと広い視野で田中さんとの交流について考えられるように、今後支援していきたい。	・調べる目的についてしつかりとらえて活動できた。「インターネットで手話をおぼえるのは難しいことが分かり、ビデオで学習してみたいと感想にあったので、次時はビデオで確かめさせられるようにしたい。そして目標についてもう一度振り返らせて、よりしっかりと目標がもてるように支援したい。 ・(聴覚障害者の)田中さんと手話でいっぱい話したいという切実な思いや願いから、「耳の不自由な人といっぱい手話で話せるようになる。」という目標が設定できた。
7 時 課 題 設 定	「こんな自分になりたい」という目標(課題設定)が決定 手話で自己紹介と話ができるようになる。	「耳の不自由な人といっぱい手話で話せるようになる。」

図9 かかわる過程でのJ男とM子の個人評価カード1の抜粋

別指導にまわるT2がつぶやきやしぐさに注意した観察をし、授業後にT1, T2で共通理解したことが良かった。

また、観察方法としての行動や発言、発表は、子どもが書いたワークシートの書き込みと合わせて、授業後に総合的にじっくり評価することにより、次時の支援や指導、学習活動の改善のために効果的だった。その際、図7と図8のような子どもの自己評価は、教師がより子どもの内面にせまる見取りを行うために重要な観察資料となった。さらに、教師の協力的な指導の場合であれば、ひとりの子どもの評価に対して共通理解をはかることができるので、子どもの学習意欲を高めていくための良い支援や指導へとつなげていける。

図9は、教師が実態把握したことを記述した個人評価カード1である。毎時間ごとに記述し、次時の教師の言葉かけ・会話による支援や学習活動の改善、教師の指導力向上にも生かせるようにした。このような指導と評価の一体化は、子ども一人ひとりが課題設定できるようになるために、きめの細かい個別指導を行っていくうえで必要不可欠である。教師は、一人ひとりの観察を完全にできるわけではないので、毎時間個人評価カード1に記述できるような評価活動を日常的に意識化していくことが、内面にせまる見取りを行っていくために必要だと感じた。

以上のことから、本物とかかわる感動体験の場を設定し、実態把握のための観察と意欲を高

めるための言葉かけ・会話を行えば、指導と評価の一体化をはかることができ、子どもの内面にせまる見取りができるように感じられた。そして、教師の言葉かけ・会話による支援をうけて、子ども一人ひとりがこんな自分になりたいという目標を自分なりにもてることができた。

2 たかまる過程

検証のキーワード：

振り返る場
自己評価
自分を良い方向へコントロール
していく力

「こんな自分になりたいカード」(資料編参照)を使って、自分自身がたてた目標や評価規準をもとに自己評価できるようにし、子どもが自分自身の学びに対して責任をもちながら自己評価力が高まっていくようにした。4年生の児



図10 中間発表会(第16時)での指文字の発表

童にとっては、4観点の評価規準をたてることが難しいと予想していたが、図11のような説明をすることにより、ほとんどの子どもが自分なりの評価規準をたてることができた。図12は、J男の自己評価を表にまとめたものである。

学習への関心・意欲・態度	最後まであきらめず、楽しく学習していけるようになるために・・・
総合的な思考・判断	今までよりも、もっとしっかり自分の考えがもてるようになるために・・・
学習活動に関わる技能・表現	いままでよりも、もっとうまく調べたり、発表したりできるように・・・
知識を応用し総合する力	学習したことを生かして、これからの自分に生かしていけるようになるために・・・

図11 子供用評価規準をたてるための説明例

こんな自分になりたい・・・手話で自己紹介と話ができるようにする。	10~11時	12~13時	14~15時	16~17時	17~18時	19~20時	21~22時	23~24時	25時
子どもの評価規準4観点	3	2	3	3	2	3	3	3	3
いろいろなことを調べる	3		3				3		3
はずかしがらずに				3	3		3	3	3
いつでも手話ができるように							3		2

図12 J男の自己評価の様子

たかまる過程では、他にも自己評価能力を高めるために、ワークシート（資料編参照）を工夫して見通しをもって学習計画がたてられるようにしたり、振り返る場として中間発表会と学校行事であるふるさと学習発表会を設定したりした。振り返る場では、友だち同士による相互評価や外部講師や保護者による外部評価を積極的に取り入れることにより、自己の追究活動に深まりや広がりが見られることをねらった。

相互評価では、指導案第17~18時や第25時（資料編指導案参照）にあるように、お互いの追究活動についての感想が交流できるように工夫した。外部評価では、学級通信などを通して子どもたちの追究の様子を伝え、アドバイスや感想をフィードバック（資料編外部評価参照）できるように工夫した。

例えばJ男は、第10~11時にインターネット（資料編手話リンク集参照）から指文字表を見つけ、指文字で「こんな自分になりたい」という目標を達成するための追究がはじまった。中間発表会では、「指文字があ～とまでできてすごい。」など多くの友だちから賞賛を浴びた。またふるさと学習発表会では全校児童や地域の保護者、お年寄りなど大勢を前にして、50音全部を発表し大きな拍手を浴びた。これらの相

互評価や外部評価は、J男が自信をもてるようになり、追究の質を高めていくことができたのではないだろうか。図13はJ男の個人評価カード1である。（M子の追究活動の様子については、資料編個人評価カードを参照。）

J男やM子の例から、たかまる過程で振り返る場を設定し、自己評価や相互評価、外部評価

児童の実態（反応・様子・変容など）	
8～9時	・学習計画を進んでたてることが出来た。インターネットや本、ビデオを調べる手段にして、自分なりに学習計画をたてることが出来た。
10～11時	・計画通り、指文字のページを見つけ印刷した。学校では練習する時間が足りなくて、家に資料を持ち帰りたいと聞いてきた。
14～15時	・手話のことをITで集中して調べることが出来た。後半、先々週に自分が印刷した資料も活用して、指文字を暗記しようとしていた。自信をもって発表できるように、事前に発表の練習をT1が見られるような支援をした。第16時の中間発表会では、自分がインターネットから見つけて印刷した資料を活用し、指文字を「あ」から「と」まで暗記し、自信をもって発表でき、友だちからも称賛を受けていた。
23～24時	・自分なりに目的意識をしっかりとって、取り組んでいた。指文字50音を暗記して発表するために努力していた。
25時	指文字50音を全部覚えて発表し、会場から拍手を浴びた。作文には、「今日一番うれしかったのは、50音が出来たこととです。」と書いていた。今まで追究してきたことを十分に発表できたようで、本人にとっては満足のいくものになったようだ。自分で決めたことを最後まで頑張り認められたことが自信に繋がったようだ。

図13 J男の個人評価カード1

を計画的に取り入れていく工夫をしたことは、子ども一人ひとりが自分を良い方向へコントロールしていく力を発揮できるようになったのではないだろうか。そして、自己評価力を磨き、学習スキルを身に付けていくことができたのではないだろうか。

3 むきあう過程

検証のキーワード：
生かす場
ポートフォリオ
新しい自分を見つけ学ぶ喜びを感じる

これまでに学んだことを生かす場として、第31~32時（資料編指導案参照）に2回目の交流会を設定した。こんな自分になりたいという目標を達成するために、子どもたちが主体的に計画・準備を進めていけるような指導の工夫をした。（資料編指導案第27~30時参照）このことにより、第1回目とは質の違う交流の楽しさを実感できたのではなからうか。次ページ図14は、J男とM子の交流会後の感想である。

<p>す。つよ前したまたでとわ ばうのたのじてもわ いみ自。た。で、エまし 手な分と、おますくは 話がはてもだチきよは がっも母だてきよは でた手楽さ時ヤてきよは きけ話した間ーが良し てどにかたがムかつて うはっちあムかつて れ今あたもまつた したまでやつた いとりますりてや でいきまいり</p>	<p>総合のしゅ業をふりかえつて M子</p>	<p>交流のわをひろげよう J男</p>
--	-----------------------------	--------------------------

図14 J男とM子の交流会後の感想

指導の工夫として、ポートフォリオで追究の振り返りを生かせるようにした。第26時(資料編指導案参照)に、今までの追究活動で使ってきたワークシートや手紙、様々な資料を、改めてクリアケースに自分の学びの履歴として整理する活動を行った。評価計画での評価の目的と方法は、ABCDEGH-3《ポートフォリオ》とした。その際、「自分だけの総合的な学習の教科書になるように。」というアドバイスを投げかけた。

例えば、M子のポートフォリオは、ワークシート類だけを順序よく整理していた。そして、追究の過程で集積した資料は、ボックスケースの方に保存されていた。図15は、M子のボックスケースの内容である。教師としては、ボックスケースの内容に価値のあるものが多く見られたので、さらに取捨選択が行われると良かったと感じた。ポートフォリオを工夫していた例として、F男とL子の例がある。2人は、追究過程で集積した価値ある資料を、クリアファイルに上手に取捨選択し、誰が見ても追究の様子がよくわかるような工夫をしていた。(資料編ポートフォリオ参照)

<p>手話通訳者高橋さんからの手紙のコピー 1枚 50音指文字表(インターネットの印刷) 2枚 聴覚障害者の生活の苦勞(インターネットの印刷) 8枚 余白にメモ書き有り 保護者からのアドバイスカード 1枚 学習スケジュールカード 1枚 第1回交流会の作文 1枚 ふるさと学習発表会用ワークシート 1枚 聴覚障害者田中さんへのファックス 1枚 第1回交流会のお礼の手紙と下書き 各1枚ずつ 聴覚障害者の田中さんの職場見学のお礼の手紙コピー ふるさと学習発表会の作文 手話通訳者高橋さんから教えてもらったことをまとめた原稿 2枚 ふるさと学習発表会のためのせりふ原稿 1枚 かかわる過程の自己評価折れ線グラフ(教師が作成して配布) 中間の学習上状況を保護者に伝えた学級通信 1枚</p>

図15 M子のボックスケースの内容

M子が成長したと感じられたのは、その後の第2回交流会に向けての計画や準備での活動の姿である。図16のむきあう過程でのM子の個人評価カード1にあるように、**友だちと協力して学習できる力**が成長している姿がみられた。教師は、評価計画にあるように、D-2(生き方を問いかけるための言葉かけ・会話による支援)を行ったが、このようなM子の変容は、ポートフォリオで自分の追究を振り返ったことや、これまでに学んだことを生かす場を設定したことにより、「こんな自分になりたい」という目標が強く意識できるようになったからではないかと考える。

児童の実態(反応・様子・変容など)	
26時	学習ファイルを自分なりにしっかり整理していた。前回よりもいろいろなことを、手話で会話できるように計画をたてて練習していた。
27~28時	話し合いの司会に進んでなった。ふるさと学習発表会の話し合いの時よりも、みんなの意見を受け入れながら司会をすることができていて、友だち関係で成長している姿がみられた。準備係の仕事も率先して放課後も残りがんばった。
29~30時	自分からいろいろなアイデアを出しながら、準備係の仕事ががんばった。放課後も責任感をもって残ってやっていた。
31~32時	準備や練習をがんばった成果が出て、橋詰さんに手話でいろいろなことを話したりすることができた。作文には、「私はとても緊張していました。でもうまくできて良かったです。」と書いていた。また、「前の自分は、手話にはあんまり興味なかったけど、今だといっぱい手話でできてうれしいです。」と書くなど、成長した自分自身を見つめ、その達成感や充実感を感じていた。保護者が、子どもから手話を教えてもらって感動したという感想を話してくれた。

図16 むきあう過程でのM子の個人評価カード1



こんにちは 私の名前は M子です。
よろしくお願ひします。
家族はお父さんとお母さんと弟です。部活動は、バレーです。
好きな動物は犬とねこです。好きな食べ物のみかんです。
習い事は習字、ピアノです。好きなことは何ですか？
(聴覚障害者からの回答)
11月12日に見学に行ったときは、ありがとうございます。
私は さんが餃子が得意ということがわかりました。

図17 第2回交流会でのM子の交流の様子

M子の例だけでなく、交流会での様子や交流会後の作文などの観察では、子ども一人ひとりが様々な緊張感や充実感、達成感、成就感など味わい、新しい自分を見つけ学ぶ喜びを感じる姿を見取ることができた。

4 学習過程全体

検証のキーワード：
多様な評価方法
個人評価カード
教師・子ども・地域の評価力

多様な評価方法を、学習過程の中で計画的に取り入れて指導と評価の一体化をはかっていくことは、特に総合的な学習においては重要なことだと感じた。本研究では、その際個人評価カード1、2を活用することによって、より効果的に子どもの内面にせまる教師の見取りができたと考える。また、教師の評価力を磨いていくこともできたと感じた。

個人評価カード1は、評価の観点や内容をもとに、授業後に一人ひとり記述した。特に目立ったことがなくても、子どものワークシート類やポートフォリオ、作品などを参考にしたり、教師の協力的な指導の場合には共通理解をはかたりして、教師の観察から必ず記述した。子どもの主体的な学びを支援していく上で、教師がどの子どもに対しても、可能な限り評価の目を向けていく姿勢がなくてはならないと感じた。図18は、たかまる過程でのM子の個人評価カード2である。個人評価カード1の記述を、

観点と内容の相関として整理できるようにした。ワープロソフト上でコピーして貼り付けるなどの操作なので、それほど大変な作業ではない。むしろこの作業によって、教師は、子どもの主体的な追究活動を価値付けていくことができた。また総括的評価は、内部評価として、今後の学習活動の改善や教師の指導力向上のために生かせるようにした。本研究では、教師の協力的な指導を取り入れたので、総括的評価についても共通理解がはかれた。

保護者に対しては、学級通信等で子どもたちの学習の様子を伝えることを中心に、教師の願いや学習活動についての説明などを伝えた。意図的にポートフォリオを家庭に持ち帰らせて見てもらうこともした。(資料編学級通信参照)このような保護者への啓発を通して、次ページの図19と図20にあるように、保護者の評価力が高まっていった。これらのアドバイスは、学級通信等で子どもと保護者へフィードバックした。保護者の評価力は、子どもたちに自分自身に対する肯定感や自信を与えるとともに、教師に対しても大きな励ましになった。

外部講師も、次ページ図21にあるように、追究活動での子どもたちとのかかわりのなかで、

評価の4観点	学習への関心・意欲・態度	総合的な思考・判断	学習活動に関わる技能・表現	知識を応用し総合する力	総合的評価
総合知 総合のねらい	学習意欲の高まり 問題の解決や探求活動に主体的・創造的に取り組む態度	自己評価能力の向上 学び方やものの考え方を身に付ける	学び方・考え方 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力	生き方の自覚 自己の生き方を考える態度がはぐえ、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力	
評価規準 身に付けたい力 10項目	確善をもつ人と楽しく交流するために、自分自身の問題として意欲的に追究していくことが出来る。	解決するために自分にとって一番良い方法を見つけ、自分自身の学習活動を見直ししながら、見通しをもって問題解決し、総合的に考える力を伸ばしていこうとする。	自分の出来ることをいろいろな方法から学び、自分なりに考え工夫し、自己表現できる。	自分について見つめ直すことにより、いろいろな人とコミュニケーションすることの良さが自分なりにわかり、これからの生活のなかで積極的に交流の輪を広げていこうとする。	
これからどんなことをしていけば課題が解決できるか、上手に自分で目標や計画をたてる力	目標に向けて、進んで見通しのある学習計画をたてる事が出来た。	いろいろな学習方法を上手に取り入れていた。	記述事項なし		
わからないことをいろいろな手段で調べる力	友だちと楽しくビデオを見ながら歌の歌詞を練習していた。反省には少しふさぎたああって、しっかり自己評価できていた。	「捨て犬かんとボチ」を真剣に50分読んでいた追究に深まりがみられるので、目標とのつながりを意識して発表内容をまとめられるように支援していきたい。	田中さんへの見学のお願いの文章は、目的が書かれていなかったため指導した。		
コンピュータやデジタルカメラなどをじょうずにつかえる力	記述事項なし		黙々と自分が知りたい情報を探して調べていた。印刷の仕方が分からない友だちなどに、親切に教えたりも出来た。		?
友だちと協力して学習できる力	中間発表会では、今までの成果を上手にまとめてみんなに発表することが出来た。		発表でのビデオを見て、自分が声が小さく早口で、何を言っているのかわからないと気付いた。友だちの発表から良いところもたくさん見つけることができた。		
今までの自分の知識を合わせたり、調べたことからまねをしないで新しく自分の考えをつくる力	職場見学のお願いの手紙(ファックス)には、「田中さんのしょく場へ行って、田中さんがどうやって仕事をしているのかと、1番やりにくそうな仕事を見て、勉強したいからです」と書くなど、自分なりに理由がもてた。	発表に向けて職場見学の劇をどうするかのは、話し合いをした。みんなの意見をまとめようとがんばっていた。しかし、強がりな面があり、一部の男子と口論になったりして、なかなか計画が進まなかった。放課後も延長して行い、ようやく形が出来てきた。今後の活動の様子を期待したい。			
学習したせいかをみんなの前でくふうして発表できる力	作文には、「つかえたりまちがえたりはなかったけど、いつもより大きい声で発表できた。シナリオなど中心になって考えすぎてうれしかったです。」と書いていた。本人なりにリーダーシップを発揮して準備してきたので、満足感のある発表が出来たようだ。	だんだん大きな声で言うようになってきた。シナリオなど中心になって考えすぎてうれしかったです。」と書いていた。本人なりにリーダーシップを発揮して準備してきたので、満足感のある発表が出来たようだ。	記述事項なし	記述事項なし	
総合的評価					?

分析・教科学習の力がしっかりしていて、課題を自覚した追究ができていた。しかし、ふるさと学習発表会では、追究で深めたことを十分に生かすことが出来ていなかった。作文では本人なりに「いつもより大きな声で発表できてうれしかった」と書いているが、自己評価ではやはり満足した評価ではないことが窺われる。ふるさと学習発表会では、追究活動で得た力を十分に発揮できるように、見守りながら言葉かけなどの支援を行っていた。

図18 たかまる過程でのM子の個人評価カード2

田中さんに直接手紙やファックスで交流できたので、より深く耳の不自由な人の生活や気持ちがわかったと思います。交流会はとても良いことだと思うので、これからも続けてほしいと思います。特に手話は学んでおくと良いと思いました。

てれくさそうにやっているのでもう少し元気がよければいいと思います。毎日の生活の中で少しずつやっていると、自然と手話も上手になれると思います。がんばっているいろいろ覚えてほしいと思います。

自分で決めた目標に一歩でも近づけるように、がんばれ！いろいろな人と話が出来て、自分のことを知ってもらえることは大切なことだと思います。手話はとても難しいと思いますが、「自分のことをわかってもらう。相手のことをもっと知りたい。」という気持ちがあれば、必ずやりとげられると思います。

だんだんと手話ができるようになってきてすごいと思います。発表する時も、手話をおりませながらみんなの前で出来たらもっとすごい！手話ができることで、自分の世界も広がっている人々と話ができるなんてもっともったすごい！！

図19 たかまる過程での保護者のアドバイス

4年生のみなさまへ

皆さんお元気ですか。私も元気です。山々もきれいに色づいてきましたが、そちらはいかがですか。朝夕はめっきり寒くなったでしょうね。

先日はお手紙ありがとうございました。楽しく読ませていただきました。皆さんに喜んでいただけうれしく思っています。自分でいろいろ考え工夫して自己紹介をしましたね。田中さんに見事に通じました。良かったですね。また、楽しい交流も出来ました。先生のお話では、テレビの音量をゼロにして聞こえない人の体験もしたようです。聞こえない人たちは、いろいろな不便や苦労に負けずに、いろいろ工夫して明るく生活しています。手話を学びたいと思った人もたくさんいるようです。ぜひ学んでください。

皆さんのように聞こえない人たちの生活を理解して、応援してくれる人が増えればどんなにいいでしょう。いつでもどこでも手話や身振り、筆談（書いて話をする）でお話ができる社会になることが、聞こえない人たちの夢です。

図21 外部講師からのアドバイス（手紙）

より子どもたちの実態にあったアドバイスをしてもらえるようになり、評価力が高まったのではなからうか。また、これは直接外部講師の評価力と結びつくわけではないが、職場訪問をした子どもたちの活動から影響を受けて、聴覚障害者の同僚の方が手話学習をはじめたという後日談が伝えられた。総合的な学習が、地域をも巻き込んでいく力を秘めていると感じた。

研究のまとめと課題

三者のポートフォリオの重要性

総合的な学習がねらいとする問題解決力や生きる力を育てていくために、子ども主体の学習をどう指導し評価していくかという大きな課題がある。それに対して、長期的な視点から多様な評価方法を計画し工夫していくことは、子どもの変容を見取り、一人ひとりに応じたきめの細かい評価や指導のために不可欠である。本研究では、評価の目的と方法の相関表の他に、個

私も20歳の頃、中之条で下車するつもりが川原湯駅にまちがって下車しまったという、こまっている耳の不自由な高校生にでくわし、ちょうど前橋へ行くところだったので車に乗せておくったことがありました。やりとりは紙に書いて手まねや口まねで、コミュニケーションがうまくとれなかったのでもう少し出来ていけばな～と今になって思います。田中さん以外の人とも出会うことがきつとあると思うので、今習っていることはいつかきつと役立つ日が来るので、がんばってください。（みなさん、貴重な体験からのアドバイスですヨ。）

みんなの力ってすごい！みんなの学習能力におどろかされました。テレビなどで目にするくらいで、今まで自分のまわりの生活の中で、手話などというものにふれることもなかったの。目で見ただけと実際にやってみるとでは雲泥の差があるでしょうね。この学習を機会に、聴覚障害者に限らずいろいろな身体に障害をもつ人たちの気持ちが少しでもわかるようになってくれたらなと思います。とても楽しく感動しました。（先生たちも同感。自分たちの力で身に付けることができたというのは、ホントすごいことなんです。この力をこれからも・・・）

図20 いかす過程後での保護者のアドバイス

注（ ）内は教師のコメント

人評価カードを活用したことが、単元全体を通しての多様な評価活動の拠り所となった。総合的な学習は単元計画が長期間に及ぶことから、教師自身にとって、子どもたちの学習活動を実態把握したり、支援や指導の向上や学習活動の改善をはかたりするために、より指導と評価の一体化をめざすポートフォリオが重要であることを実感した。今後さらに、ポートフォリオ評価の可能性を探るためにも、教師、子ども、地域の三者でつくるポートフォリオ評価に焦点を当てた研究を深めていきたい。

これが、評価のパラダイム転換だ！

総合的な学習では、教師が評価の主体であり、子どもが評価の対象だという一方的な図式はもはや通用しない。評価の主体は、教師でもあり、子どもでもあり、地域でもある。また評価の対象も、教師自身の評価力量であり、子どもの学ば力であり、それをささえる地域からの評価力である。そして、三者の評価力が相互に高まっていく中で、教師・子ども・地域の三者が納得できる評価をめざしていかなければならない。これが、現時点での本研究が提言する評価のパラダイム転換である。

総合的な学習は、まだまだ試行錯誤の段階である。教師は評価の主体でありながら、評価の対象である。つねに教師は自己の評価観を問い直し、指導と評価の一体化を深めていかなければならない。

参考文献 資料編参照